

澄江堂雜記

芥川龍之介

青空文庫

一 大雅の画

僕は日頃大雅たいがの画ゑを欲しいと思つてゐる。しかしそれは大雅でさへあれば、金を惜まないと云ふのではない。まあせいぜい五十円位の大雅を一幅ふく得たいのである。

大雅たいがは偉い画ゑ描かきである。昔、高たか久ひさ靄あい崖がいは一文いちもん無しの窮境きゆうけいにあつても、一幅の大雅だけは手離てりさなかつた。ああ云いふ英えい靈い漢かんの筆ふでに成なつた画ゑは、何百円いへどと雖いへども高い事はない。それを五十円に値切りたいのは、僕に余財よざいのない悲かなしさである。しかし大雅の画品ゑひんを思おもへば、たとへば五百万円を投なずるのも、僕のやうに

五十円を投ずるのも、安いと云ふ点では同じかも知れぬ。芸術品の価値も小切手や紙幣しへいに換算出来ると考へるのは、度どし難い俗物ばかりだからである。

Samuel Butler の書いた物によると、彼は日頃「出来の好いい、ちやんと保存された、四十シリング位のレムブラント」を欲しがつてゐた。処が實際二度までも莫迦ぼかに安いレムブラントに遭遇した。一度は一磅ポンドと云ふ価あたひの為に買はなかつたが、二度目には友人の *ogin* に諮はかつた上、とうとうそれを手に入れる事が出来た。その画ゑはどう云ふ画だつたか、どの位の金を払つたか、それはどちらも明らかではない。が、買った時は千八百八十七年、買った場所はストランド（ロンドン）の或質しちみせ店の店さきである。

かならず かう云ふ先例もあつて見ると、五十円の大雅たいがを得んとするのは、必しも不可能事ではないかも知れぬ。何処どこか寂しい町の古道具屋の店に、たつた一幅売り残された、九霞きゅうか山樵さんせうの水墨山水——僕は時時退屈すると弥勒みろくの出世でも待つもののやうに、こんな空想にさへ耽ふける事がある。

二 にきび

昔「羅生門らしやうもん」と云ふ小説を書いた時、主人公の下人げにんの頬ほほには、大きい面皰にきびのある由を書いた。当時は王朝時代の人間にも、面皰のない事はあるまいと云ふ、謙遜けんそんすれば 当推量あてずありやうに拠つたの

であるが、その後左経記ごさけいきに二君とあり、二君又は二禁なるものは今日の面炮である事を知つた。二君等は勿論当て字である。尤ももつとかう云ふ発見は、僕自身に興味がある程、傍人ぼうじんには面白くも何なんともあるまい。

三 將軍

官憲くわんけんは僕の「將軍しやうぐん」と云ふ小説に、何行なんぎやうも抹殺を施ほどこした。処けふが今日の新聞を見ると生活に窮した廢兵たちは、「隊長殿にだまされた閣下連の踏台ふみだい」とか、「後顧するなど大うそつかれ」とか、種種のポスタアをぶら下げながら、東京街頭を歩

文芸と階級問題との關係は、頭と毛生えくすりとの關係に似ている。もしちやんと毛が生えてゐれば、必しも塗る事を必要としない。又もし禿はげ頭だつたとすれば、恐らくは塗つても利きかないであらう。

五 芸術至上主義

芸術至上主義の極致はフロオベルである。彼自身の言葉によれば、「神は万ばんしやう象の創造に現れてゐるが、しかも人間に姿を見せない。芸術家が創作に対する態度も、亦また斯かくの如くなるべきで

ある。「この故にマダム・ボヴァリイにしても、ミクロコスモスは展開するが、我我の情意には訴へて来ない。

芸術至上主義、——少くとも小説に於ける芸術至上主義は、確かに欠伸あくびの出易いものである。

六 一切不捨

何なんなにの某がは帽子ぼうしばかり上等なのをかぶつてゐる。あの帽子さへなければ好よいのだが、——かう云ふ言葉を做なす人がある。しかしその帽子を除いたにしても、何の某の服装なるものは、寸すんぶん分ぶんも立派つぱになる次第ではない。唯貧しげな外観が、全体に蔓まんえん延えんするば

かりである。

何なんなにがしの某の小説はセンチメンタルだとか、何の某の戯曲はインテレクチュアルだとか、それらはいづれも帽子の場合と、選ぶ所のない言葉である。帽子ばかり上等なるものは、帽子を除き去る工夫くふうをするより、上着もズボンも外ぐわいたう套たうも、上等ならしむる工夫くふうをせねばならぬ。センチメンタルな小説の作者は、感情を抑へる工夫をするより、理智を活いかすべき工夫をせねばならぬ。

これは独り芸術上の問題のみではない。人生に於おても同じ事である。五欲の克服のみに骨を折つた坊主ぼうずは、偉い坊主になつた事を聞かない。偉い坊主になつたものは、常に五欲を克服すべき、他の熱情を抱いだき得た坊主である。雲うんせう照せうさへ坊主らせつの羅切らせつを聞いて

は、「男根は須く隆隆たるべし」と、弟子共に教へたと云ふではないか？

我等の内にある一切のものはいやが上にも伸ばさねばならぬ。それが我等に与へられた、唯一の成仏の道である。

七 赤西蠣太

或時志賀直哉氏の愛読者と、「赤西蠣太の恋」の話をした事がある。その時僕はこんなことを言つた。「あの小説の中の人物には榮螺とか鱒次郎とか安甲とか、大抵魚貝の名がついてゐる。志賀氏にもヒユウモラス・サイドはないのではない。」

すると客は驚いたやうに、「成程なるほどさうですね。そんな事には少しも気がつかずにゐました」と云つた。その癖客は僕なぞよりも「赤西蠟太の恋」の筋をはつきり覚えてゐたのである。

客は決して輕薄けいはくじ児ではない。學問も人格も兼備した、寧ろむし珍しい文芸通である。しかもこの事實に気づかなかつたのは、志賀氏の作品の型とでも云ふか、兎とに角かく何時いつか頭の中にさう云ふ物を拵こしらへた上、それに囚とらはれてゐた為であらう。これは独り客のみではない。我我も氣をつけねばならぬ事である。

八 釣名文人

古来作家が本を出した時、その本の好評を計るはかる為ために、新聞雑誌に載るべき評論を利用する事は稀まれではない。中には手加減を加へるところか、作者自身然るべき匿名とくめいのもとに、手前味噌てまへみその評論を書いたのもある。

ド・ラ・ロシユフウコオルは名高い格言集の作家である。処がサント・ブウヴの書いたものによると、この人さへジュールナアル・デ・サヴァンに出た評論には、彼自身修正を施したらしい。しかもジュールナアル・デ・サヴァンは、当時発行された唯一ゆゑいちの新聞であり、その評論の載つたのは、千六百六十五年三月九日だと云ふのだから、作家の評論を利用するのも、ずいぶん淵源えんげんは古いものである。僕はロシユフウコオルの格言を思ひながら、この

記事を読んだ時、實際苦笑くせうせずにはゐられなかつた。それを思へば日本の文壇は、新開地だけに悪風も少い。売笑批評とか仲間褒なかまほめ批評とか云つても、まづ害毒は知れたものである。

ちなみ因ちなみに云ふ。この評論の筆者はマダム・ド・サブレ、評論されたのは例の格言集である。

九 歴史小説

歴史小説と云ふ以上、一時代の風俗なり人情なりに、多少は忠実でないものはない。しかし一時代の特色のみを、——殊に道徳上の特色のみを主題としたものもあるべきである。たとへば日本

の王朝時代は、男女関係の考へ方でも、現代のそれとは大分違ふ。
 其^{そこ}処^{ゑんぜん}を宛^{ゑんぜん}然^{ぜん}作者自身も、和泉式部^{いづみしきぶ}の友だちだつたやうに、虚心
 平氣に書き上げるのである。この種の歴史小説は、その現代との
 対照^{あひだ}の間に、自然或暗示を与へ易い。メリメのイザベラもこれ
 ある。フランスのピラトもこれである。

しかし日本の歴史小説には、未^{いま}だこの種の作品を見ない。日本
 のは大^{たい}抵^{いてい}古人の心に、今^{こん}人^{じん}の心と共通する、云はばヒュマン
 な閃^{ひらめ}きを捉^{とら}へた、手つ取り早い作品ばかりである。誰か年少の天
 才の中に、上記の新機軸を出すものはあるか？

十 世人

西洋雑誌の載せる所によると、二十一年の九月巴里パリにアナトール・フランスの像の建つた時、彼自身その除幕式に演説を試みたと云ふ事である。この頃それを読んでみると、かう云ふ一節を發見した。「わたしが人生を知つたのは、人と接触した結果ではない。本と接触した結果である。」しかし世人は書物に親しんでも、人生はわからぬと云ふかも知れない。

ルノアルの言つた言葉に、「画ゑを学ばんとするものは美術館に行け」とか云ふのがある。しかし世人は古名画を見るよりも、自然に学べと云ふかも知れない。

世人とは常にかう云ふものである。

十一 火渡りの行者

社会主義は、りひきよくちよく理非曲直の問題ではない。単に一つの必然である。僕はこの必然を必然と感ぜないものは、あたかひわた恰も火渡りの行ぎやう者じやを見るが如き、驚嘆の情を禁じ得ない。あの過激思想取締法案とか云ふものの如きは、正にこの好例の一つである。

十二 俊寛

平家物語やへいけものがたり源平盛衰記げんぺいせいすゐき以外に、しゆんくわん俊寛の新解釈を試み

たものは現代に始まつた事ではない。近松門左衛門ちかまつもんざゑもんの俊寛の如きは、最も著名なものの一つである。

近松の俊寛の島に残るのは、俊寛自身の意志である。丹左衛門たんのさゑもんのじやうもとやす

門尉基康なりつねは、俊寛成経なりつね康頼等三人の赦免状しやめんじやうを携へて

ゐる。が、成経なりつねの妻になつた、島の女千鳥ちどりだけは、舟に乗る事

を許されない。正使基康せいしもとやすには許す気があつても、副使の妹尾せのをが

許さぬのである。妻子さいしの死を聞いた俊寛は、千鳥を船に乗せる為

に、妹尾太郎せのをたらうを殺してしまふ。「上使じやうしを斬りたる咎とがによつて、

改めて今鬼界きかいが島の流人しまるにんとなれば、上かみの御慈悲おみじの筋も立ち、御上お

使おちどの落度おちどいささかなし。」この英雄的な俊寛は、成経康頼等の乗

船すすを勧めながら、従容しやうようと又かうも云ふのである。「俊寛が乗

るは弘誓くぜいの船、浮き世の船には望みなし。」

僕は以前久米正雄くめまさをと、この俊寛しゆんくわんの芝居を見た。俊寛は故人

段四郎だんしろう、千鳥ちどりは歌右衛門うたゑもん、基康もとやすは羽左衛門うざゑもん、——他は記憶に

残つてゐない。俊寛が乗るは云云うんぬんの文句は、当時大いに久米正

雄を感じさせたものである。

近松ちかまつの俊寛は源平盛衰記げんぺいせいすゐるきの俊寛よりも、遙かに偉い人にな

つてゐる。勿論舟出ふなでを見送る時には、嘆き悲しむのに相違ない。

しかしその後は近松ちかまつの俊寛も、安らかに余生を送つたかも知れぬ。

少くとも盛衰記の俊寛程、悲しい末期まつごには遇あはなかつたであらう。

——さう云ふ心もちを与へる限り、「苦しまざる俊寛」を書いた

ものは、夙つとに近松にあつたと云ふべきである。

しかし近松の目ざしたのは、「苦しまざる俊寛」にのみあつたのではない。彼の俊寛は「平家女護が島」の登場人物の一人である。が、倉田、菊池両氏の俊寛は、俊寛のみを主題としてゐる。鬼界が島に流された俊寛は如何に生活し、又如何に死を迎へたか？——これが両氏の問題である。この問題は殊に菊池氏の場合、かう云ふ形式にも換へられるであらう。——「我等は俊寛と同じやうに、島流しの境遇に陥つた時、どう云ふ生活を営むであらうか？」

近松と両氏との立ち場の相違は、盛衰記の記事の改めぶりにも、窺はれると云ふ事を妨げない。近松はあの俊寛を作る為に、俊寛の悲劇の関鍵たる赦免状の件さへも変更した。両氏も勿論近

松に劣らず、盛衰記の記事を無視してゐる。しかし両氏とも近松のやうに、赦免状の件は改めてゐない。与へられた条件の内に、俊寛の解釈を試みる以上、これだけは保存せねばならぬからである。

丁度ちやうどその場合と同じやうに、倉田氏と菊池氏との立ち場の相

違も、やはり盛衰記の記事を変更した、その変更のし方に見えるかも知れぬ。倉田氏が俊寛の娘を死んだ事にしたたり、菊池氏が島を豊沃ほうよくの地にしたり、——それらは皆両氏の俊寛、——「苦しめる俊寛」と「苦しまざる俊寛」とを描出するに便だつた為であらう。僕の俊寛もこの点では、菊池氏の俊寛の蹤あとを追ふものである。唯菊池氏の俊寛は、寧ろ外部むしの生活に安住の因を見出してゐる。

るが、僕のはかならず必しもそればかりではない。

しかしうたひ謡やじやうり浄瑠璃にある通り、不毛の孤島に取り残された儘、

しかもなほ悠悠たる、偉い俊寛を考へられぬではない。唯この巨き鱗よりんを捉とらへる事は、現在の僕には出来ぬのである。

附記 盛衰記に現れた俊寛は、機智に富んだ思想家であり、鶴つる

の前まへを愛する色いろ好みである。僕は特にこの点では、盛衰記の記

事に忠実だつた。又俊寛の歌なるものは、康やすより頼なりや成つね経つたなより拙

いやうである。俊寛は議論には長じてゐても、詩人肌ではなかつ

たらしい。僕はこの点でも、盛衰記に忠実な態度を改めなかつた。

又盛衰記の鬼界が島は、たとひタイテイではないにしても、満まんざ

更ら岩ばかりでもなささうである。もしあの盛衰記の島の記事か

ら、へんど辺土に対する都会人の恐怖や嫌悪けんをを除き去れば、ぞんぐわいこ存外古
ふうどき風土記にありさうな、愛すべき島になるかも知れない。

十三 漢字と仮名と

漢字なるものの特徴はその漢字の意味以外に漢字そのものの形にも美醜を感じさせることださうである。かな仮名は勿論使用上、音お標文字んぺうもじの一種たるに過ぎない。しかし「か」は「加」と云ふやうに、祖先はいづれも漢字である。のみならず、いつも漢字と共に使用される関係上、自然と漢字と同じやうにかな仮名そのものの形にも美醜の感じを含み易い。たとへば「い」は落ち着いてゐる、

「り」は如何にも鋭いなどと感ぜられるやうになり易いのである。これは一つの可能性である。しかし事實はどうであらう？

僕は実は平仮名には時時形にこだはることがある。たとへば

「て」の字は出来るだけ避けたい。殊に「何何して何何」と次に続けるのは禁物である。その癖「何何してゐる。」と切れる時には苦にならない。「て」の字の次は「く」の字である。これも

丁度折れ釘のやうに、上の文章の重量をちやんと受けとめる力

に乏しい。片仮名は平仮名に比べると、「ク」の字も「テ」の字

も落ち着いてゐる。或は片仮名は平仮名よりも進歩した音標文字なのかも知れない。或は又平仮名に慣れてゐる僕も片仮名には感じが鈍いのかも知れない。

十四 希臘末期の人

この頃エジプトの砂の中から、ヘラクレニウムの熔岩の中から、希臘^{ギリシヤ}人の書いたものが発見される。時代は350 B.C. から150 B.C. 位のものらしい。つまりアテネ時代からロオマ時代へ移らうとする中間の時代のものである。種類は論文、詩、喜劇、演説の草稿、手紙——まだ外にもあるかも知れない。作者は従来書いたものの少しは知られてゐた人もある。名前だけやつと伝つてゐた人もある。勿論^{もちろん}全然名前さへ伝はつてゐなかつた人もある。しかしそれは兎も角も、さういふ断簡^{だんかん}零墨^{れいぼく}を近代語に訳し

たものを見ると、どれもこれも我我にはお馴染みの思想ばかりである。たとへば Polystratus と云ふエピクロス派の哲学者は「あらゆる虚偽と心労とを脱し、人生を自由ならしむる為には万物生成の大法を知らなければならぬ」と論じてゐる。さうかと思へば Arcidas と云ふ所謂いはゆる犬儒派けんじゆはの哲学者は「蕩児たうじと守銭奴しゆせんぬとはくわうはく黄白くわうはくに富み、予ばかり貧乏するのは不都合である！……正義は土豚どとんのやうに盲目なのか？ Themis（正義の女神）の明めいは蔽おほはれてゐるのか？」と大いに憤慨を洩もらした後、「遮さ莫あらばあれ我徒は病弱を救ひ、貧窶ひんるを恵むことを任にしたい」と勇ましい信念を披露ひんろうしてゐる。更に又彼に先立つこと三十年余と伝へられる Olophon の [Phoe&nix] は「何びとも金持ちには友だちである。

金さへあれば神神さへ必ず君を愛するであらう。が、万一貧しければ母親すら君を憎むであらう」と諷刺ふうしに満ちた詩を作つてゐる。最後に〔O&noande〕の Diogenes は「予の所見に従へば、人類は百般の無用の事に百般の苦楚くそを味あぢつてゐる。……予は既すでに老人である。生命の太陽も沈まうとしてゐる。予は唯予の道を教へるだけである。……天下の人は悉く互に虚偽を移し合つてゐる。丁ち度やうど一いち群ぐんの病びやう羊やうのやうに」と救援の道を教へてゐる。

かう云ふ思想はいつの時代、どこの国にもあつたものと見える。どうやら人種の進歩などと云ふのは蛞蝓なめくぢの歩みに似てゐるらしい。

十五 比喩

メタフオアとかシミリイとかに文章を作る人の苦勞するのは遠い西洋のことである。我我は皆せち辛がらい現代の日本に育つてゐる。さう云ふことに苦勞するのは勿論もちろん、兎とに角意味かくを正確に伝へる文章を作る余裕よゆうさへない。しかしふと目に止まつた西洋人の比喩ひゆの美しさを愛する心だけは残つてゐる。

「ツインガレラの顔は脂粉しふんに荒らされてゐる。しかしその皮膚ひふの下には薄氷うすらひの下の水のやうに何かはまだかすかに仄ほのめいてゐる。」

これは Wassermann の書いた売笑婦ツインガレラの肖像である。

僕の訳文は拙いのに違ひない。けれどもむかしGuysの描いた、
優しい売笑婦の面影はありありと原文に見えるやうである。

十六 告白

「もつと己れの生活を書け、もつと大胆に告白しろ」とは屢諸
君の勧める言葉である。僕も告白をせぬ訣ではない。僕の小説は
多少にもせよ、僕の体験の告白である。けれども諸君は承知しな
い。諸君の僕に勧めるのは僕自身を主人公にし、僕の身の上に起
つた事件を臆面もなしに書けと云ふのである。おまけに巻末の
一覧表には主人公たる僕は勿論、作中の人物の本名仮名をずら

りと並べろと云ふのである。それだけは御免ごめんを蒙かうむらざるを得ない。

第一に僕はもの見高い諸君に僕の暮しの奥底をお目にかけるのは不快である。第二にさう云ふ告白を種に必要以上の金と名とを着服するのも不快である。たとへば僕も一茶いつさのやうに交合記録を書いたとする。それを又中央公論か何かの新年号に載せたとする。読者は皆面白がる。批評家は一転機を来したなどと褒ほめる。友だちは、愈いよいよ裸になつたなどと、——考へただけでも鳥とり肌はだになる。ストリンドベルクも金さへあれば、「痴人ちじんの告白こくはく」は出さなかつたのである。又出さなければならなかつた時にも、自国語の本にする気はなかつたのである。僕も愈いよいよ食はれぬとなれば、どう

云ふ活計を始めるかも知れぬ。その時はおのづからその時である。しかし今は貧乏なりに兎とに角かく露命つなを繋いでゐる。且又体は多病にもせよ、精神状態はまづノルマアルである。マゾヒスムスなどの徴候は見えない。誰が御苦勞にも恥ぢ入りたいことを告白小説などに作るものか。

十七　　チヤプリン

社会主義者と名のついたものはボルシエヴィツキたると然らざるとを問はず、悉く危険視されるやうである。殊にこの間の大地だい震の時にはいろいろその為に崇たられたらしい。しかし社会主義者

と云へば、あのチャアリイ・チャプリンもやはり社会主義者の一ひとり人である。もし社会主義者を迫害するとすれば、チャプリンも亦また迫害しなければなるまい。試みに某憲兵大尉の為にチャプリンが殺されたことを想像して見給へ。家鴨あひる歩きをしてゐるうちに突き殺されたことを想像して見給へ。苟いやしくも一たびフィルムの上に彼の姿を眺めたものは義憤を発せずにはゐられないであらう。この義憤を現実に移しさへすれば、——兎とに角かく諸君もブラツク・リストの一人ひとりになることだけは確かである。

十八 あそび

これはサンデイ毎日所載、ふくだまさのすけ福田雅之助君の「最近の米国庭球界」の一節である。

「テイルデンは指を切つてから、却かへつて素晴すばららしい当りを見せる様になつた。なぜ指を切つてからの方が、以前よりうまくなつたかと云ふに、一つは彼の気が緊張してゐるからだ。彼は非常に芝居があつて、勝てるマツチにもたやすく勝たうとはせず、或程度まで相手をあしらつて行くゆらしかつたが、今年度は「指」と云ふハンデイキャップの為に、ゲエムの始めから緊張してかかるから、尚なほさら更強いのである……」

ラケットを握る指を切断した後のち、一層腕いつそうを上げたテイルデンはまことに偉大なる選手である。が、指の満足だつた彼も、――

同時に又相手を翻弄ほんろうする「あそび」の精神に富んでゐた彼も必しも偉大でないことはない。いや、僕はテイルデン自身も時時はちよつと心の底に、「あそび」の精神に富んでゐた昔をなつかしがつてゐはしないかと思つてゐる。

十九 塵勞

僕も大抵たいていの売文業者のやうに忙そうぼうたる暮しを営んでゐる。勉強も中中思ふやうに出来ない。二三年前ぜんに読みたいと思つた本も未だに読まずにゐる始末しまつである。僕は又かう云ふ煩わづらひは日本にばかりあることと思つてゐた。が、この頃ふとレミ・ド・グルモ

ンのことを書いたものを読んだら、グルモンはその晩年にさへ、
 毎日ラ・フランスに論文を一篇、二週間目にメルキュウルに對話
 を一篇書いてゐたらしい。すると芸術を尊重する仏蘭西フランスに生れた
 文学者も甚だ清閑せいかんには乏しい訣わけである。日本に生れた僕などの
 不平を云ふのは間違ひかも知れない。

二十 イバネス

イバネス氏も日本へ来たさうである。滞在日数も短かかつたし、
 まあ通り一ぺんの見物をすませただけであらう。イバネス氏の評
 伝には Camille Piollet の [V. Blasco-Ibañez, Ses romans et le roma

nde sa vie] なげふんハ本も流行してゐる。と云つて読んでゐる次第ではない。唯二三年前の横文字の雑誌に紹介してあるのを讀んだだけである。

「わたしの小説を作るのは作らずにはゐられない結果である。：わたしは青年時代を監獄かんごくに暮した。少くとも三十度は入獄したであらう。わたしは囚人しうじんだつたこともある。度たび野蛮やばんな決闘の為に重傷を蒙かうむつたこともある。わたしは又人間の堪へ得る限りの肉体的苦痛を嘗なめてゐる。貧乏のどん底に落ちたこともある。が、一方いつぱうには代議士に選挙されたこともある。土耳其トルコのサルタンの友だちだつたこともある。宮殿に住んでゐたこともある。それからずつと鉅万きよまんの金を扱ふ実業家にもなつてゐた。亜米利加アメリカ

では村を一つ建設した。かう云ふことを話すのはわたしは小説を生活の上に実現出来ることを示す為である。紙とインクとに書き上げるよりも更に数等巧妙に実現出来ることを示す為である。」

これはピトオレエの本の中にあるイバネス氏自身の言葉ださうである。しかし僕はこれを読んでも、文豪イバネス氏の云ふやうに、格別小説を生活の上に実現してゐると云ふ気はしない。するのは唯小説の広告を実現してゐると云ふ気だけである。

二十一 船長

僕は上^{シャンハイ}海へ渡る途中、筑^{ちくご}後丸^{ごまる}の船長と話をした。政^{せい}友^{いう}

会くわいの横暴とか、ロイド・ジヨオジの「正義」とかそんなことばかり話したのである。その内に船長は僕の名刺を見ながら、感心したやうに小首を傾けた。

「アクタ川と云ふのは珍らしいですね。ははあ、大阪毎日新聞社、——やはり御専門は政治経済ですか？」

僕は好いい加減に返事をした。

僕等は又少しばらく時の後のち、ボルシエヴィズムか何かの話をし出した。僕は丁度ちやうどその月の中央公論に載つてゐた誰かの論文を引用したが、生憎あいにく船長は中央公論の読者ではなかつた。

「どうも中央公論も好いいですが、——」
船長は苦にがにがしさうに話しつづけた。

「小説を余り載せるものですから、つい買ひ渋つてしまふのです。あれだけはやめる訣わけに行かないものでせうか？」

僕は出来るだけ情けない顔をした。

「さうです。小説には困りますね。あれさへなければと思ふのですが。」

爾来じらい僕は船長に格別の信用を博したやうである。

二十二 相撲

「負けまじき相撲すまふを寝ものがたりかな」とは名高い蕪村ぶそんの相撲の句である。この「負けまじき」の解釈には思ひの外ほか異説もあるら

しい。「蕪村句集講義」によれば虚子きよし、碧梧桐へきいどう兩氏、近頃は又木村架空氏きむらかくうも「負けまじき」を未来の意味としてゐる。「明日あすの相撲は負けてはならぬ。その負けてはならぬ相撲を寝ものがたりに話してゐる。」——と云ふやうに解釈するのである。僕はずつと以前から過去の意味にばかり解釈してゐた。今もやはり過去の意味に解釈してゐる。「今日けふは負けてはならぬ相撲を負けた。それをしみじみ寝ものがたりにしてゐる。」——と云ふやうに解釈するものである。もし将来の意味だつたとすれば、蕪村は必ず「負けまじき」と調子を張つた上五かみごの下へ「寝ものがたりかな」と調子の延びた止めとを持つて来はしなかつたであらう。これは文法の問題ではない。唯「負けまじき」をどう感ずるかと云ふ芸術

的しよくかく觸角の問題である。尤も「蕪村句集講義」の中でも、子規しき居士こじと内藤鳴雪ないとうめいせつ氏とはやはり過去の意味に解釈してゐる。

二十三 「とても」

「とても安い」とか「とても寒い」と云ふ「とても」の東京の言葉になり出したのは数年以前のことである。勿論「とても」と云ふ言葉は東京にも全然なかつた訣わけではない。が従来の用法は「とてもかなはない」とか「とても纏まとまらない」とか云ふやうに必ず否定を伴つてゐる。

肯定に伴ふ新流行の「とても」は三河みかはの国あたりの方言であら

う。現に三河の国の人のこの「とても」を用ゐた例は元禄四年

に上梓じやうしされた「猿蓑ざるみの」の中に残つてゐる。

秋風あきかぜやとても芒すすきはうごくはず 三河みかは、子尹しゐん

すると「とても」は三河の国から江戸へ移住する間に二百年余あひだりかかつた訳である。「とても手間取つた」と云ふ外はない。

二十四 猫

これは「言海げんかい」の猫の説明である。

「ねこ、(中略) 人家ジンカ二畜カフ小サキ獣チヒ。人ヒトノ知シル所トコロナリ。温柔ウンジウニシテ馴ナレ易ヤスク、又能マタヨク鼠ネズミヲ捕トラフレバ畜カフ。然シカレドモ竊セツ盗タウノ性セイ

アリ。形虎カタチヲニ似テニシヤクニ尺ニシヤクニ足ラズ。(下略)

成なるほど程猫は膳ぜんの上の刺身さしみを盗せつたうんだりするのに違ひはない。が、これをしも「竊盗ノ性アリ」と云ふならば、犬は風俗壊乱の性あり、燕は家宅侵入の性あり、蛇は脅迫けふはくの性あり、蝶てふは浮浪の性あり、鮫さめは殺人の性ありと云つても差支さしつかへない道理であらう。

按ずるに「言海」の著者大槻文彦先生は少くとも鳥獸魚貝ぎよばいに対する誹謗ひぼうの性を具へた老学者である。

二十五 版数

日本の版数は出たらめである。僕の聞いた風説によれば、或相

当の出版業者などは内務省への献本二冊を一版に数へてゐるらしい。たとひそれは謔うそとしても、今日こんにちのやうに出たらめでは、五十年百版と云ふ広告を目安めやすに本を買つてゐる天下の読者は愚弄ぐろうされてゐるのも同じことである。

もつとフランス

尤も仏蘭西の版数さへ甚だ当てにならぬものださうである。例へばゾラの晩年の小説などは二百部を一版と号してゐたらしい。

しかしこれは悪習である。何も香水やオペラ・バツクのやうに輸入する必要はないに違ひない。且又メルキュルは出版した本に一何冊目と記したこともある。メルキュルを学ぶことは困難にしろ、一版を何部と定さだめた上、版数も偽いつはらずに広告することは当然日本の出版業組合も厲れいかう行して然るべき企てであらう。いや、か

う云ふ見易いことは賢明なる出版業組合の諸君のとうに気づいて
 るる筈である。するとそれを実行しないのは「もし佳書を得んと
 欲せば版数の少きを選べ」と云ふ教訓を垂れてゐるのかも知れな
 い。

二十六 家

はやかはかうたらう
 早川孝太郎氏は「さんしうよこやまばなし三州横山話」の巻末にまじなひの歌
 をいくつも揚げてゐる。

盗賊の用心に唱へる歌、——「ねるぞ、ねだ、たのむぞ、たる
 木、夢の間まに何ごとあらば起せ、けたはり桁梁」

火の用心の歌、——「霜柱、氷の梁はりに雪の桁けた、雨のたる木に露の葺ふき草」

いづれも「家いへ」に生命を感じた古いにしへびとの面目めんもくを見るやうである。かう云ふ感情は我我の中にもとうの昔に死んでしまつた。我我のちよりも後に生れるものは是等こゝろちの歌を読んだにしろ、何なんの感銘も受けないかも知れない。或は又鉄筋コンクリートの借家しゃくや住まひをするやうになつても、是等の歌は幻まぼろしのやうに山かげに散在する茅葺かやぶき屋根を思ひ出させてくれるかも知れない。

なほ次手ついでに広告すれば、早川氏の「三州横山話」は柳田国男やなぎだくにを氏の「遠野物語とほのものがたり」以来、最も興味のある伝説集であらう。発行所は小石川区茗荷谷町五十二番地郷土研究社きやうどけんきうしや、定価は

僅かに七十銭である。但し僕は早川氏も知らず、勿論広告も頼まれた訣ではない。

付記 なほ四五十年前の東京にはかう云ふ歌もあつたさうである。「ねるぞ、ねだ、たのむぞ、たる木、梁も聴け、明けの六つには起せ大びき」

二十七 続「とても」

肯定に伴ふ「とても」は東京の言葉ではない。東京人の古來使ふのは「とても及ばない」のやうに否定に伴ふ「とても」である。近來は肯定に伴ふ「とても」も盛んに行はれるやうになつた。

たとへば「とても綺麗だ」「とてもうまい」の類である。この肯定に伴ふ「とても」の「猿蓑」の中に出てゐることは「澄江堂雜記」(隨筆集「百艸」の中)に辯じて置いた。その後島木赤彦さんに注意されて見ると、この「とても」も「とてもかくても」の「とても」である。

秋風やとても芒はうごくはず 三河、子尹

しかしこの頃又乱読をしてゐると、「続春夏秋冬」の春の

部の中にもかう言ふ「とても」を発見した。

市雛やとても数ある顔貌 化羊

元禄の子尹は肩書通り三河の国の人である。明治の化羊は

何国の人であらうか。

二十八 丈艸の事

蕉門せうもんに龍象りゆうざうの多いことは言ふを待たない。しかし誰が最
 也的てきてき的てきてきと芭蕉ばせをの衣鉢いはつを伝へたかと言へば恐らくは内藤丈艸ないとうぢやうさう
 であらう。少くとも発句ほつくは蕉門中、誰もこの俳諧しんぼちの新発知しんぱちほど芭
 蕉ささの寂とらびを捉へたものはない。近頃野田別天楼のだべつてんろう氏の編ぢした「丈
 艸集やうさうしふ」を一読し、殊にこの感を深うした。

前書略まへがき

木枕あかの垢いぶきや伊吹いぶきにのこる雪

大原おほはらや蝶おほはらの出おほはらて舞ふおぼろ月

谷風あをたや青田めぐを廻いほる庵きやくの客

小屏風こびやうぶに山里涼し腹の上

雷いなづまのさそひ出してや火とり虫

草芝いを出ほたるづる螢はおとの羽音はかな

鶏頭けいとうの昼いをうつすやぬり枕

病人しゆもくと撞よさむ木よさむに寝よさむたる夜寒よさむかな

蜻蛉とんぼうの来うちては蠅うちとる笠うちの中

夜明よあけまで雨吹く中や二つ星

楣ほたの火あかつきや暁あかつきがたの五六尺

是これら等の句ただは啻さに寂さびを得たと言ふばかりではない。一句一句變

化に富んでゐることは作家たる力量を示すものである。几董輩きとうはいの丈艸ぢやうさうを嗤わらつてゐるのは僭越せんゑつも亦また甚しいと思ふ。

二十九 袈裟と盛遠

「袈裟げさと盛遠もりとほ」と云ふ独白どくはく体の小説を、四月の中央公論で発表した時、或大阪の人からこんな手紙を貰つた。「袈裟げさは亘わたるの義理と盛遠もりとほの情なさけとに迫あひだられて、操みさほを守る為に死を決した烈女である。それを盛遠との間あひだに情交のあつた如く書くのは、烈女袈裟に対しても氣の毒なら、国民教育の上にも面白からん結果きたを来すだらう。自分は君の為にこれを取らない。」

が、当時すぐにその人へも返事を書いた通り、袈裟と盛遠との間に情交があつた事は、自分の創作でも何でもない。なん源平盛衰げんぺいせいす

あき記の文覚もんがくほつしん発心の条に、「はや来つて女と共に臥し居たり、ふ

さよやうやう狭夜も漸更け行きて云云」と、ちやんと書いてある事である。

それを世間一般は、どう云ふ量見か黙殺してしまつて、あの憐あはれ

む可べき女主人公をさも人間ばなれのした烈女であるかの如く広告

してゐる。だから史実を勝手に改竄かいざんした罪は、あの小説を書い

た自分になくして、寧ろあの小説を非難するブルジョア自身にあ

つたと云つて差支さしつかへない。改竄かいざんするしないは格別大問題だと

心得てゐないが、事実としてこの機会にこれだけの事を発表して

置く。勿論源平盛衰記の記事は諛うそだと云ふ考証家が現れたら、自

分は甘んじて何時いつでも、改竄者の焼印を押されようとするものである。

三十 後世

私わたしは知己ちいきを百代の後のちに待たうとしてゐるものではない。

公衆の批判は、常に正せい鵠こうを失しつしやういものである。現在の公衆は元より云ふを待たない。歴史は既にペリクレス時代のアゼンスの市民や文芸復興期のフロレンスの市民でさへ、如何いかに理想の公衆とは縁が遠かつたかを教へてゐる。既に今日こんにち及び昨日さくじつの公衆にして斯かくの如くんば、明日みやうにちの公衆の批判と雖いへども亦また推して知る

べきものがありはしないだらうか。彼等が百代の後のちよく砂と金きんとを辨じ得るかどうか、私は遺憾ゐかんながら疑ひなきを得ないのである。よし又理想的な公衆があり得るにした所で、果して絶対美なるものが芸術の世界にあり得るであらうか。今日こんにちの私の眼は、唯今日こんにちの私の眼であつて、決して明日みやうにちの私の眼ではない。と同時に又私の眼が結局日本人の眼であつて、西洋人の眼でない事たしかも確である。それならどうして私に、時と処とを超越した美の存在じゆしなどが信じられよう。成程なるほどダンテの地獄の火は、今も猶なほ東方の豎子じゆしをして戦せんりつ慄おそせしむるものがあるかも知れない。けれどもその火と我我との間あひだには、十四世紀の伊太利イタリイなるものが雲霧うんむの如くにたなびいてゐるではないか。

沉いはんや私は尋常の文人である。後代の批判にして誤らず、普ふへん遍の美にして存するとするも、書を名山に蔵する底ていの事は、私の為すべき限りではない。私が知己を百代の後に待つものでない事は、問ふまでもなく明かであらうと思ふ。

時時私は廿年の後のち、或は五十年の後、或は更に百年の後、私の存在さへ知らない時代が来ると云ふ事を想像する。その時私の作品集は、堆うづだい埃ほこりに埋うづもれて、神田かんだあたりの古本屋の棚たなの隅むなに、空しく読者を待つてゐる事であらう。いや、事によつたらどこかの図書館としよかんにたつた一冊残つた儘、無残な紙魚しぎよの餌えさとなつて、文字もじさへ読めないやうに破れ果ててゐるかも知れない。しかし――

私はしかしと思ふ。

しかし誰かが偶然私の作品集を見つけ出して、その中の短い一篇を、或は其一篇の中の何なんぎやう行ぎやうかを読むと云ふ事がないであらうか。更に虫の好いい望みを云へば、その一篇なり何行かなりが、私の知らない未来の読者に多少にもせよ美しい夢を見せるといふ事がないであらうか。

私は知己ちぎを百代の後のちに待たうとしてゐるものではない。だから私はかう云ふ私の想像が如何いかに私の信ずる所と矛盾むじゆんしてゐるかも承知してゐる。

けれども私は猶なほ想像する。落莫らくぼくたる百代の後に当つて、私の作品集を手にするいちにん一人の読者のある事を。さうしてその読者の心おぼろの前へ、臃おぼろげなりとも浮び上る私の蜃氣楼しんきろうのある事を。

私は私の愚ぐを嗤しせう笑すべき賢けん達たつの士のあるのを心得てゐる。が、私自身いへどと雖も私の愚を笑ふ点にかけては敢あへて人後に落ちようとは思つてゐない。唯、私は私の愚を笑ひながら、しかもその愚に恋こひたる私自身の意気いきち地ぢなさを憐れまずにはゐられないのである。或は私自身と共に意気地ない一般人間をも憐れまずにはゐられないのである。

三十一 「昔」

僕の作品には昔の事を書いたものが多いから、そこでその昔の事を取扱ふ時の態度を話せと云ふ注文が来た。態度とか何なんとか云

ふと、はなはむほげさ甚大袈裟に聞えるが、何もそんな大したものを持ち合せてゐる次第では決してない。まあ僕の昔の事を書く時に、どんな眼で昔を見てゐるか、云ひ換かへれば僕かへの作品の中で昔がどんな役割を勤めてゐるか、そんな事を話して見ようかと思ふ。元来かみしも袴をつけつもりての上の議論ではないのだから、どうかその心算でお聴きを願ひたい。

お伽とぎばなし噺ばなしを読むと、日本のなら「昔々」とか「今は昔」とか

書いてある。西洋のなら「まだ動物が口を利きいてゐた時に」とか「ベルトが糸を紡つむいでゐた時に」とか書いてある。あれは何故なぜであらう。どうして「今」ではいけないのであらう。それは本ほん文もんに出て来るあらゆる事件に或可能性を与へる為の前置きにちがひ

ない。何故かと云ふと、お伽とき噺ばなしの中に出て来る事件は、いづれも不思議な事ばかりである。だからお伽噺の作者にとつては、どうも舞台を今にするのは具合ぐあひが悪い。絶対に今ではならんと云ふ事はないが、それよりも昔の方が便利である。「昔々」と云へば既に太古すい緬邈たいこめんぱくの世だから、小指ほどの一寸いっすん法師ほふしが住んでゐても、竹の中からお姫様が生れて来ても、格別かくべつ矛盾むじゆんの感じが起らない。そこで予めあらかじ前へ「昔々」と食付くつつけたのである。

所でもしこれが「昔々」の由来だとすれば、僕が昔から材料を採とるのは大半この「昔々」と同じ必要から起つてゐる。と云ふ意味は、今僕が或テエマを捉とらへてそれを小説に書くとする。さうしてそのテエマを芸術的に最も力強く表現する為には、或異常な事

件が必要になるとする。その場合、その異常な事件なるものは、異常なだけそれだけ、今日こんにちこの日本に起つた事としては書きこなしにく悪い、もし強しひて書けば、多くの場合不自然の感を読者に起させて、その結果折角せつかくのテエマまでも犬死をさせる事になつてしまふ。所でこの困難を除く手段には「今日こんにちこの日本に起つた事としては書きこなしにく悪い」と云ふ語ことばが示してゐるやうに、昔か（未来は稀まれであろう）日本以外の土地か或は昔日本以外の土地から起つた事とするより外ほかはない。僕の昔から材料を採つた小説は大抵この必要に迫られて、不自然の障しやうがい碍がいを避ける為に舞台を昔に求めたのである。

しかしお伽ときばなし噺ばなしと違つて小説は小説と云ふものの要約上、ど

うも「昔々」だけ書いてすましてゐると云ふ訳には行かない。そこで略時代ほぼの制限が出来て来る。従つてその時代の社会状態と云ふやうなものも、自然の感じを満足させる程度に於ておい幾分とり入れられる事になつて来る。だから所謂いはゆる歴史小説とはどんな意味に於ても「昔」の再現を目的エンドにしてゐないと云ふ点で區別を立てる事が出来るかも知れない。——まあざつとこんなものである。

序ついでにつけ加へて置くが、さう云ふ次第だから僕は昔の事を小説に書いても、その昔なるものに大して憧しょうけい憬は持つてゐない。僕は平安朝へいあんてうに生れるよりも、江戸時代に生れるよりも、遙はるかに今こ日にんにちこの日本に生れた事を難ありがた有たく思つてゐる。

それからもう一つつけ加へて置くが、或テエマの表現に異常な

る事件が必要になる事があると云つたが、それには其そのほか外にすべて異常なる物に対して僕（我我人間と云ひたいが）の持つてゐる興味も働いてゐるだらうと思ふ。それと同じやうに或異常なる事件を不自然の感じを与へずに書きこなす必要上、昔を選ぶと云ふ事にも、さう云ふ必要以外に昔その其ものの美しさが可かなり也影響を与へてゐるのにちがひない。しかし主として僕の作品の中で昔が勤つとめてゐる役割は、やはり「ベルトが糸を紡つむいでゐた時に」である、或は「まだ動物が口を利きいてゐた時に」である。

三十二 徳川末期の文芸

徳川末期の文芸は不真面目ふまじめであると言はれてゐる。成程不真なるほど

面目ではあるかも知れない。しかしそれ等の文芸の作者は果して人生を知らなかつたかどうか、それは僕には疑問である。彼等通つうじんうじん 人も肚はらの中では如何いかに人生の暗澹あんたんたるものかは心得てゐたのではないであらうか？ しかもその事実を回避くわいひする為に（たとひ無意識的ではあつたにもせよ）洒落しやれのめしてゐたのではないであらうか？ 彼等の一人ひとり、——たとへば宮武外骨みやたけぐわいこつ氏の山さん東京とうきやう伝でんを読んで見るが好よい。ああ云ふ生涯に住しながら、しかも人生の暗澹あんたんたることに気づかなかつたと云ふのは不可解である。

これは何も黄表紙きべうしだの洒落本しやれほんだの作者ばかりではない。僕

は曲^{きよく}亭^{てい}馬^ば琴^{きん}さへも彼の勸^{くわん}善^{ぜん}懲^{ちやう}惡^{あく}主義^{しゆぎ}を信じてゐなかつたと思つてゐる。馬琴は或は信じようと努力してはゐたかも知れない。が饗^{あへ}庭^{てい}篁^{わう}村^{そん}氏の編^{へん}した馬琴日記抄^{とう}等によれば、馬琴自身^{みづかみ}の矛盾^{むじゆん}には馬琴も氣づかずにはゐなかつた筈であらう。森^{もり}鷗^{おう}外^{ぐわい}先生^{せんせい}は確^{たしか}か馬琴日記抄^にの跋^{はつ}に「馬琴よ、君は幸福^{しんぷく}だつた。君はまだ先^{せん}王^{わう}の道^{みち}に信^{しん}頼^{らい}するこゝが出来^{でき}た」とか何^{なん}とか書^かかれたやうに記憶^{きこく}してゐる。けれども僕は馬琴も亦^{また}先^{せん}王^{わう}の道^{みち}などを信じてゐなかつたと思つてゐる。

若^わし謚^{うそ}と云^いふことか言^いへば、彼等^{かれら}の作品^{さくひん}は謚^{うそ}ばかりである。彼等^{かれら}は彼等^{かれら}自身^{みづかみ}と共に世間^{あやむ}を欺^{あざむ}いてゐたと言^いつても好^よい。しかし善^{ぜん}や美^みに對^{たい}する欣^{こん}求^ぐは彼等^{かれら}の作品^{さくひん}に残^{のこ}つてゐる。殊^{こと}に彼等^{かれら}の生^{なま}き

てゐた時代はフランスのロココ王朝と共に実生活の隅隅にさへ美意識の行き渡つた時代だつた。従つて美しいと云ふことから言へば、彼等の作品に溢れた空気は如何にも美しい（勿論多少頹廢した）ものであらう。

僕は所謂江戸趣味に余り尊敬を持つてゐない。同時に又彼等の作品にも頭の下らない一人である。しかし単に「浅薄」の名のもとに彼等の作品を一笑し去るのは彼等の為に氣の毒であらう。若し彼等の「常談」としたものを「真面目」と考へて見るとすれば、黄表紙や洒落本もその中には幾多の問題を含んでゐる。僕等は彼等の作品に随喜する人人にも賛成出来ない。けれども亦彼等の作品を一笑してしまふ人人にもやはり輕輕に賛成出来ない。

い。

(大正七年—十三年)

青空文庫情報

底本：「筑摩全集類聚 芥川龍之介全集第四卷」筑摩書房

1971（昭和46）年6月5日初版第1刷発行

1979（昭和54）年4月10日初版第11刷発行

入力：土屋隆

校正：松永正敏

2007年6月26日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたった

のは、ボランティアの皆さんです。

澄江堂雑記

芥川龍之介

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>